

## アメリカ・インディアン研究

—米国先住民の世界観、歴史および法的地位—

野呂 浩\*

## A Study of the American Indian

—The Philosophy, History, and Legal Status of the American Indian—

Hiroshi Noro\*

The objective of this paper is to examine the philosophy, history, and legal status of the indigenous people of the United States.

They are not atheists, but theists, generally believing in a Supreme Being or Great Spirit. Every creation, creatures, and daily experiences are holy expressions from the Great Spirit. Trees and stones are gifts of the Spirit in physical forms and Mother Earth is a spiritual entity to them. Therefore, they are willing to take care of this planet, plus they have respect and strong bondage for their families and tribes. This is the philosophical essence of these indigenous people in the United States.

At the beginning of their encounter, the Indians and the first white people from Europe had a friendly relationship from which “Thanksgiving Day” was born. However, such a peaceful relationship did not last long. The white people began repeating the same pattern of killing the Indians and destroying their cultures. The U.S. government continued cruel policies of assimilation, reservation, submission, removal, or extermination of indigenous people in the United States. When Christopher Columbus arrived in America, about ten million Indians populated the U.S., but 95% of which has been told to have killed. We can find various resistances by Indians, but they were always put to end by the great physical power of the white people.

On September 13, 2007, after 25 years of discussion, the United Nations General Assembly adopted the Declaration on the Rights of Indigenous Peoples. Article 1 of the Declaration states clearly the “Indigenous peoples have the right to the full enjoyment, as a collective or as individuals, of all human rights and fundamental freedoms as recognized in the Charter of the United Nations, the Universal Declaration of Human Rights and international human rights law.” The United States voted against it.

The philosophical essence of the United States of “freedom” and “equality” originally comes from the Iroquois Indian culture. The Iroquois nations’ political confederacy and democratic government have greatly influenced the Articles of Confederation and the United States Constitution. The roots of the United States also had Indian roots.

The American Indian’s heart and essence of philosophy are something we cannot destroy by our physical force and they are not something past, but they are something we can apply to the 21<sup>st</sup> century world, society, and our ordinary lives. The awareness of influence from the Iroquois nations will have the power which can change the white Americans into treating the indigenous people completely free and equal as the white people.

---

\* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授  
2011年9月14日 受理

## I

アメリカ合衆国の白人アメリカ人は、自分たちが先住民でないことは承知していよう。また、アメリカ合衆国の先住民であるアメリカ・インディアンたちを非先住民である白人が虐殺し、彼らの伝統的価値観を否定した歴史も知っていよう。

アメリカ合衆国の歴史をその当初から正確に理解する為には、先住民であるアメリカ・インディアンとの歴史的関わり  
の直視が不可欠である。

先住民とは、非先住民が住む以前からある特定の地域に住み続けてきた民族のことである。アメリカ先住民世界の分析によって、先住民世界の特質が明確になるだけでなく、非先住民世界とその歴史の本質についても垣間見ることができるだろう。さらに、現在および未来における先住民および非先住民のあるべき姿を再考する方向へ必然的に導いてくれよう。

## II

「歌や踊り、あるいは断食を以て太陽を崇めるサンダンス (Sun Dance)」「聖なる場所を定め、そこで断食しつつビジョンを求める儀式 (Vision Quest)」「浄化と祈りの儀式 (Sweat Lodge)」等がアメリカン・インディアンのよく知られている儀式である。インディアンの儀式と生活には、ある程度の共通の価値観が読み取れる。「宇宙、世界の創造主を覚える」「あらゆる存在に感謝の念を抱く」「すべてを受容する心」「あらゆるものを平等に観る」「仲間を尊重する」「自分の持ち物を惜しみなく分け与える心」等である<sup>(1)</sup>。

数多くの先住民部族に共通する一つの哲学体系がある訳ではない。しかしながら、万物の創造主であるグレート・スピ

リット (名称は部族によって異なる) からすべてが発する。それ故、自然およびあらゆる存在に神性を認め、畏敬の念を抱きつつ共生する生き様が数多くの部族を貫く共通の世界観である。

宇宙の根本は精神世界であり、その物質的な表現が人、動物、草木の存在であると捉える。したがって、宇宙、地球は一つの生命体であり、そこに生きる生命はすべて関わりある存在と考える。人間が生き続けられるのは、決して人間の力のみによるのではなく、草木に癒され、動物から生き延びる知恵を教えてもらい、また、植物や動物が人間の食物になるということを悟っている。だからこそ、植物、動物を心より尊重し、共存出来るのである<sup>(2)</sup>。これがよく言及される、アメリカ・インディアンの「われわれはあらゆるものとつながっている」という哲学である<sup>(3)</sup>。

あらゆる活動がスピリットの表現である故、日常の体験も精神的、宗教的な体験として受け止められる。山に籠り、あるいは聖なる場所で天の啓示を待つときなどには、鳥や動物が生物学的な存在としてではなく、また、雲や風が気候現象としてではなく、精神世界のメッセージを囁くメッセンジャーと化するのである<sup>(4)</sup>。

呼吸や自分の思い、感情を表現する言語も、スピリット表現である<sup>(5)</sup>。また、美術の創作活動<sup>(6)</sup>も神聖なるスピリット活動である。聖なる宇宙エネルギーがあらゆる形、活動の中に存在する。したがって、あらゆる営みは霊的な活動である故に、スピリットによってのみ理解可能とされる<sup>(7)</sup>。

部族が異なっても、アメリカ・インディアンは例外なく、日常の世界でこのような認識をもって生きていたということを立証することは不可能であろう。実際、

かなり戦闘的な先住民が存在したことも事実である。したがって、美化しすぎることは厳に慎まなければならない。しかしながら、繰り返しになるが、万物を司るスピリットが存在し、自然界の風、川、湖、山、雲、星、太陽、月等がスピリットの表現である故、すべてを敬い、感謝しつつ生きる生き様こそ、アメリカ先住民に共通する宇宙観・世界観なのである。自然と共に歩むことは、物質的な意味ではなく、万物の源泉の表現としての自然と共に歩むことであり、自然との一体化とは、あくまでも世界のルーツ、創造者であるスピリットとの一体化を意味しているのである。

そして、万物を創造する創造主のもとにすべての存在根拠があるとの考えから、当然の帰結として、家族および自分が属する部族に対する強い聖なる連帯感、絆を持ち日々生活する。

### III

これまで考察したような特徴を持つアメリカ・インディアンと、非先住民はどのような歴史を築き上げてきたのか。感謝祭は17世紀におけるアメリカ先住民と清教徒入植者との平和的な関係がその起源となっている。トウモロコシ、ピーナッツ、じゃがいも等、アメリカ合衆国の農産物の50%以上が、インディアンが栽培していた作物である<sup>(8)</sup>。当初、インディアンたちが入植者たちに七面鳥やトウモロコシを与えて彼らの空腹を癒し<sup>(9)</sup>、生き延びるための知恵を伝授した。しかしながら、やがて、そうした友好的なアメリカ先住民を先住民として尊敬するのではなく、インディアンの伝統文化を否定し、虐殺を繰り返すようになる<sup>(10)</sup>。アメリカ・インディアンは、自分たちの価値観に基づいて生きることを禁止

され、想像を絶する数々の悲惨な歴史を強いられる<sup>(11)</sup>。

そして、アメリカ先住民は先祖代々住み続けてきた土地から追放され、特別な保留地に無理矢理移動させられる。

アメリカ先住民の保留地は、ある民族、部族を一定の場所に閉じ込めるという意味で、一種の強制収容所であると言える。ならば、アメリカ合衆国の歴史において、アメリカ・インディアンと日系アメリカ人だけが強制収容所に隔離されたことになる<sup>(12)</sup>。つまり、白人には敵視する集団を隔離するという特質がある。隔離とは当然、自然発生するものではないので、ある部族、民族への諸々の差別や偏見がその源泉であろう。

都市に住むアメリカ・インディアンは、白人と同じように貧困、雇用問題、差別、家庭内暴力、医療、教育、福祉の問題、アルコール、ドラッグの問題等に直面している<sup>(13)</sup>。

悲惨極まりない強制移住の歴史もある。先住民の地で金が発見されたため、1830年に、大統領のアンドリュー・ジャクソンが「インディアン強制移住法 (Indian Removal Act)」を策定。チェロキー族1万5000人が1838年10月から1839年3月の厳しい冬の時期に1600キロの旅を強いられ、4人に1人が死亡した。このことは、「涙の旅路」としてよく知られている<sup>(14)</sup>。強制移住は1842年頃で終わるが、1890年12月29日、サウスダコタ州のウンデット・ニーでスー・インディアン300人あまりをアメリカ第七騎兵連隊が殺戮。そのうちの200人は女性と子供であった。1891年の元旦に、凍てついた死体を大きな溝に放り込んで埋葬<sup>(15)</sup>。

また、さまざまな同化政策によってインディアンが伝統的な言語、文化と共に生きることを禁じ、非人道的な民族虐殺、

残虐行為の歴史を創り上げてきた。

ヨーロッパ人がアメリカ大陸に来るようになった頃、推定 1000 万人いたといわれるインディアンは、このような虐殺により実に 95% が死に絶えた<sup>(16)</sup>。また、天然痘菌を付着させた毛布をインディアンたちに贈り、故意に大量虐殺を狙ったという歴史もある。おそらく最初の細菌戦術であろう。一人のインディアンがその計画を実施した白人を街路上で背後から刺して殺害<sup>(17)</sup>。

自己の利益に適わないと判断するや、アメリカ・インディアンを惨殺、追放し、土地を奪って彼らの存在を抹消しようとする、忌まわしい歴史である。アメリカ先住民を野獣のごとく見做し、次々と捕まえ、虐殺してきた<sup>(18)</sup>。

勿論、アメリカ・インディアン側の数々の抵抗運動も起こる。1969 年、先住民の諸部族からなるアメリカ先住民の青年活動家たち、「インディアン・オヴ・オール・トライブス」が、サンフランシスコ湾に浮かぶアルカトラズ島を占拠。アメリカ大陸はもともと先住民のものであるというメッセージを全世界に発信。1969 年 11 月 20 日から 1971 年 6 月 11 日まで島を占拠し、この島を「ネイティヴ・アメリカン研究センター」<sup>(19)</sup>にすると主張。しかし、州政府が島への電気、水道を止め、1971 年 6 月 11 日に、武装した連邦保安官らが占拠していた活動家を逮捕し終結。指導者リチャード・オークスは 1972 年 9 月 20 日に白人人種差別論者によって射殺される。

連邦政府の政策に対する、部族を超えた初めての抗議行動であり、全世界へ、アメリカ・インディアンのおかれた状況を訴えたという意味ではそれなりの意味があった。しかしながら、結局は白人の圧倒的な力によって終結させられる。これまでの虐殺の歴史と基本的に同じパタ

ーンである。

#### IV

現在のアメリカ合衆国に住む白人アメリカ人で、「物質と精神が、分ちがたく結びついている」<sup>(20)</sup>との考えを持っている人がどれ程いるだろうか。物質主義的で、自らの物欲、支配欲を満たすことこそ幸福と考えている者が多いのではなかろうか。国家としてのアメリカ合衆国は、戦争を繰り返し、核兵器を使用した唯一の国であり、今なお数多くの核弾頭を保有している。

アメリカ先住民は、もともと現代のような科学の発達したコンピュータ時代、または資本主義社会の中に生きていた訳ではないので、アメリカ先住民の世界観を今日の白人アメリカ人も身に付けよ、と言っても無理があろう。しかしながら、2050 年までにすべてのアメリカ人の中に先住民の血が入り込むとの指摘がある<sup>(21)</sup>。生物学的な意味で、何分の一かのアメリカ・インディアン血液が混じるという事実だけではない。その血液の中に精神性を重んじ、あらゆるものの間に神聖なる関係があることを信じ、すべてに感謝の気持ちで接するアメリカ・インディアン遺伝子 DNA が含まれている故、いつの日か、そうした DNA の遺伝子が目覚めることを願うのは筆者だけであろうか。

アメリカ合衆国の先住民の遺伝子の問題であり、日本人には所詮関係のない話である、と一笑に付すことは出来ないようである。なぜならば、「1989 年、日本人の一部と北米インディアンに共通のルーツがあることが DNA の比較から明らかになった。」との指摘もあるからである<sup>(22)</sup>。アメリカの先住民は、DNA レベルにおいて、われわれ日本人の先住民と重な

る部分があるのである。

「自由と平等」を重んじる平和なアメリカ先住民イロコイ族の祈りが、現在のアメリカ合衆国が喪失した大切な何かを指し示してくれる。

われらはわれらを支えてくれる、  
母なる大地に感謝します。  
水を運ぶ河と小川に感謝します。  
病気を治す力を持ったさまざまな薬を恵んでくれる、植物たちに感謝します。  
われらの生命を育むトウモロコシと、  
その仲間のそら豆とカボチャに感謝します。  
果物を実らせてくれる生垣と木々に感謝します。  
太陽が沈んだ後も、闇を照らす光を与えてくれる、月と星に感謝します。  
.....  
われらはまた、慈悲深い眼差しで大地を見つめてきた太陽に、感謝します。  
最後にわれらは「グレート・スピリット」に感謝します。  
あらゆる善きものを身にまとい、われら子供らの幸福のため、万物を導いてくださる「グレート・スピリット」に、  
われらは感謝をささげます<sup>(23)</sup>。

## V

世界の国々は、何世紀にもわたって先住民に与えてきた甚大な被害を認め、過ちを償う努力をしている。全世界の先住民の人権侵害を無くそうと、各国政府と先住民の間で20年を超える交渉が重ねられ、2007年9月13日の国連総会第61会期において、「先住民の権利に関する国際連合宣言 (United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples)」が採択された。その第1条に、「先住民は、集団または個人として、国際連合憲章、世界人権宣言

および国際人権法に認められたすべての人権と基本的自由の十分な享受に対する権利を有する。(Indigenous peoples have the right to the full enjoyment, as a collective or as individuals, of all human rights and fundamental freedoms as recognized in the Charter of the United Nations, the Universal Declaration of Human Rights and international human rights law.)」と明記された<sup>(24)</sup>。

世界人権宣言第1条には、「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心を授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。(All human beings are born free and equal in dignity and rights. They are endowed with reason and conscience and should act towards one another in a spirit of brotherhood.)」と宣言されている<sup>(25)</sup>。日本はこの「先住民の権利に関する国際連合宣言」の採択に賛成票を投じたが、アメリカ合衆国は反対票を投じている。反対票を投じる背景には、民族構成などもあるが、アメリカ・インディアンに数々の悲惨な歴史を強いてきたアメリカ合衆国の理性と良心、および同胞の精神の程度が窺い知れる採決行動である。

アメリカ合衆国の独立宣言には、「すべての人間は平等に創造されている(The Unanimous Declaration of the thirteen United States of America: We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal...)」と謳われている。さらに続けて、「すべての人間は決して奪われることのない諸権利を神授されており、その中には生命や自由、そして幸福の追求が含まれている。(The Unanimous Declaration of the thirteen

United States of America:…they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness.)」と書かれてある。独立宣言時には先住民を想定していなかったであろうが、現在、アメリカ合衆国で生まれたアメリカ・インディアンは、連邦政府の保護下にあるアメリカ合衆国市民と位置付けられている。すべてのインディアンにアメリカ合衆国の市民権が認められる「インディアン市民権許可法 (Indian Citizenship Act)」が、1924 年に制定されている。

「自由と平等」はまさにアメリカ合衆国建国の根幹を成すスピリットであるが、法律上に自由と平等という用語が謳われるだけで実態が伴わなければ、独立宣言に宣言される真のアメリカ合衆国とは言えない。

アメリカ合衆国建国の立役者であるフランクリンやジェファーソンは、少年時代から、11 世紀に形成されたアメリカ先住民インディアンたちの連合国である、「イロコイ五部族連合」より、自由の国アメリカが誇る「自由、平等」思想や統治方法を学び、新国家の制度や合衆国憲法の中に取り入れた。鷲の国章、連邦制、言論の自由等もイロコイ連合の影響である。このイロコイ族は、部族間の血で血を洗う歴史を繰り返した末に、「自由」、「平等」、「多様性」を尊重する連邦を創り上げたアメリカ先住民なのである<sup>(26)</sup>。つまり、アメリカ合衆国の土台である独立宣言および合衆国憲法そのもののルーツが、先住民アメリカ・インディアンなのである。アメリカ合衆国のルーツは、実はアメリカ・インディアンにあったのである。

イロコイ族のもう一つの祈りを添えて考察を閉じよう。

おお、大いなる聖霊よ。…私の手が、あなたの創ったすべてのものを大切に、私の耳が、あなたの声をききもらさぬようにさせて下さい。あなたが私たちにお教えになったことも、一枚の木の葉、一つの岩の下にもあなたがそっとひめた教訓の数々を知ることができるように、私を賢明にして下さい。

おお、私の創造者よ、私は強くありたい。私の仲間たちにうちかつたためではなく、私の最大の敵、私自身とたたかうことができるように<sup>(27)</sup>。

「自由と平等」思想の奥深くに存在する心根を垣間見せてくれる祈りである。この心根こそ、先住民・非先住民の平和的共存の礎である。

#### 注

- (1) 天外伺朗、衛藤信之 著『イーグルに訊け—インディアンに学ぶ人生哲学』飛鳥新社 2003 年 pp. 26-35
- (2) エリコ・ロウ 著『お金やモノがなくても幸せに暮らせる アメリカ・インディアン知恵』PHP 研究所 2004 年 pp. 101-102
- (3) リチャード・アードス 著 仙波喜代子 訳『CRYING FOR A DREAM The World Through Native American Eyes 夢にかよう魂 インディアンという生き方』グリーンアロー出版社 2001 年 p. 16
- (4) 『お金やモノがなくても幸せに暮らせる アメリカ・インディアン知恵』pp. 184-185
- (5) グレゴリー・カヘーテ 著 塚田幸三 訳『インディアンの環境教育』日本経済評論社 2009 年 pp. 40-41
- (6) 『インディアンの環境教育』

- p. 42
- (7) 『インディアン環境教育』  
p. 43
- (8) 藤永茂 著『アメリカ・インディアン悲史』朝日新聞社版 1974 年  
p. 36
- (9) 『アメリカ・インディアン悲史』  
p. 35
- (10) 『お金やモノがなくても幸せに暮らせる アメリカ・インディアンの知恵』p. 102
- (11) 『お金やモノがなくても幸せに暮らせる アメリカ・インディアンの知恵』p. 7
- (12) 北山耕平 著『ネイティブ・アメリカンとネイティブ・ジャパニーズ Native America and Native Japanese』太田出版 2007 年  
p. 174
- (13) 『ネイティブ・アメリカンとネイティブ・ジャパニーズ Native America and Native Japanese』  
p. 11
- (14) アレックス・W・ビーラー 著 片岡しのぶ 訳『そして名前だけが残った―チェロキー・インディアン涙の旅路』あすなろ書房 1998 年  
pp. 80-81
- (15) 『アメリカ・インディアン悲史』  
p. 250
- (16) 『イーグルに訊け―インディアンに学ぶ人生哲学』  
p. 165
- (17) 『アメリカ・インディアン悲史』  
p. 96
- (18) 『アメリカ・インディアン悲史』  
p. 41
- (19) 安部珠理 著『アメリカ先住民―民族再生にむけて』角川学芸出版  
2005 年 p. 134
- (20) 安部珠理 著『アメリカ先住民の精神世界』日本放送出版協会 1994 年 p. 150
- (21) 『ネイティブ・アメリカンとネイティブ・ジャパニーズ Native America and Native Japanese』  
p. 18
- (22) 『ネイティブ・アメリカンとネイティブ・ジャパニーズ Native America and Native Japanese』  
p. 16
- (23) [http://mandalaya.com/na\\_a.html](http://mandalaya.com/na_a.html)
- (24) <http://www.un.org/esa/socdev/unpfii/en/drip.html>
- (25) [http://www.unic.or.jp/information/universal\\_declaration\\_of\\_human\\_rights\\_japanese/](http://www.unic.or.jp/information/universal_declaration_of_human_rights_japanese/)
- (26) 『イーグルに訊け―インディアンに学ぶ人生哲学』  
pp. 188-189
- (27) 『アメリカ・インディアン悲史』  
p. 242